



更科源蔵(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動が続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印



『北海道文学館趣意書』
1967年10月刊



『物語・北海道文学盛衰史』
1967年6月・河出書房新社刊



1967年6月27日に開催された文芸講演会で講演する更科



1966年10月25日から開催された「北海道文学展」中央が更科
1人おいて右に伊藤整日本近代文学館理事長(当時)

北海道文学館と『物語・北海道文学盛衰史』

1967(昭和42)年4月22日、北海道文学館の設立総会が開かれた。『北海道文学館設立の趣意』(北海道文学館趣意書)1967年10月発行)には「郷土(北海道)／筆者注)が生んだ文学者を記念することはもちろんのこと、基本的な文献・資料を保存することさえ、まだ行われていない。北海道にとって大切な資料が散逸して行く現状は、見るに忍びず…この現状をかねがね憂慮した関係者は、『北海道文学展』を開催…」とあり、北海道文学館が設立される前年、1966(昭和41)年1月に、北海道文学展の実行委員会が発足しました。

実行委員は、北海道に関係する文学者たちの資料収集や必要な資金集めに奔走することになります。文学展の予算は当初、数十万円という慎重しやかな額であったものが、企業を訪問して寄附金をお願いし、文学者の色紙を販売するなどして、最終的には500万円近い決算になったといわれています。

北海道文学展は、同年10月25日に札幌市内のデパートを会場に開催。道内外から集めた文学資料3千点あまりの展示と伊藤整・中野重治・大江健三郎の文芸講演会が行われ、6日間の会期中の入場者は

1万8千人ほどと大成功を収めました。

北海道文学展を観た人から、この成果を解消してしまうのは惜しい、資料を散逸させないで常設展示したり、研究したりするための施設が北海道に必要ではないか、との声が出始めます。

「北海道文学館設立について」(『北海道文学館趣意書』)で更科は「文学展を開く最初から、主催者の心の底にひそかに期待されていた(北海道文学館のこと／筆者注)飾りつけに使った写真資料や、寄贈された資料が相当数にのぼり…将来文学館のようなものができ…寄託してもよい…夢に描いていたことが、現実として一歩踏み出した…」と語ります。

一方、北海道文学展の準備と歩みを同じくして、北海道新聞夕刊に『物語・北海道文学盛衰史』が同年5月16日から95回連載され、翌1967年6月に同名で発行されています。同月27日には「北海道文学館発足記念『物語・北海道文学盛衰史』出版記念文芸講演会」を開催。北海道文学館理事長として更科は「北海道文学館について」と題した講演を行っています。

料金受取人払郵便
郵便中央局 認
承
4076
差出有効期間
平成27年3月
31日まで
(切手不要)

あかべの政策課 政策調整係 行

弟子屈町役場

0883292